

明治の木造建築 栗山町の小林邸

北海道立総合研究機構森林研究本部 真田 康弘



■はじめに

札幌市の中心部から車で1時間と少しのところにある栗山町。町内を流れる夕張川沿いに建つ小林酒造の酒蔵等のうち13棟は国登録有形文化財建造物となっており、地域の歴史的景観を形づくっています（写真1）。

その中に、地域がまだ開拓期にあった明治30年から整備されてきた旧店舗兼社長住宅があります。建物と調度品には貴重な木材がたくさん使われており、平成26年からの一般公開で多くの訪問者を楽しませてくれているところです。

古い木造建築や調度品について興味を持っておられる林産関係者も多いと思いますので、ここで紹介させていただきます。



写真1 小林酒造の酒蔵群

■小林酒造のこと

道内最古の酒蔵である小林酒造は、明治11年に札幌の狸小路の南側で創業し、その後、栗山に移転して明治34年から現在地で「北の錦」銘柄の酒造りをしています。近年では、他社に先駆けて道産米を原料に取り入れて現在では原料米を全て道産米としたうえで、特定名称酒と呼ばれる高いグレードの製品のみを醸造しているほか、活性炭濾過をしないため稲穂色をしているなど、こだわりのある酒造りをしています。

煉瓦や石づくりの蔵などは、明治30年頃から大正初めにかけて建てられたものが多く、印象に残る独特的の景観を見せています。毎年、4月の上旬の週末に酒

蔵開放のイベントを行っており、蔵の中にも入ることができます。平成28年は2日間で3万人を越える来場があったとのことで、栗山町の中心街にかけて人があふれています。

■小林邸概要

小林邸を大きく分けると、①帳場（旧店舗・事務室）と書斎・仏間などからなる主屋（しゅおく）、②主屋から一番蔵まで続く土間と茶の間など生活の場、③離れの客間、④土蔵、という構成になっており、総部屋数20室以上の豪邸です。数年前まで所有者が住んでいたことから内部の手入れも良く、明治からの古い調度品もそのまま多数残されています。木材知識がある人にとっては、入場無料の玄関ギャラリーと喫茶コーナーに入るだけでも楽しめることと思います。

小林邸は広いので、案内（見学）は2つのコースを3ヶ月毎に入れ替えています。1時間ほど、経営者一族の女性達の案内で回って、最後に炉のある和室に座って抹茶とお菓子などをいただきます。文化財保存協力費として千円が必要です。華やかに見える酒づくりを陰で支えてきた女性達のつましい生活や忍耐、古くて大きな木造家屋での苦労話など、興味深い話題が多く、あっという間に時間が過ぎていったという声をよく聞いています。

さて、それではまず駐車場に車を置いて、やはり国登録有形文化財建造物となっている直売店（酒器などの展示物が多数あります）や倉庫、蔵などの横を通って、小林邸の玄関まで行ってみましょう。

なお、文中に出てくる樹種や建物の整備年代等は、様々な情報から筆者が判断したものです。

■玄関

玄関付近の外壁はスギ板です（写真2）。ほぼ無節で、風雨により浮づくり状になっています。おそらく昭和初期に貼り直したもので80年以上は経過しているはずなのですが、まだまだ使用に耐えられるように見えます。



写真2 玄関付近の外観

玄関に入ってすぐの床は、一般公開の際に改修しています。使われなくなった大きな酒樽を削って床板にしたそうで、削った時にはとても良い酒の香りがしたとか。材が傷んでいたため歩留まりは悪かったようですが、蔵元ならではのリユースだと感心します。

玄関の続きにあるギャラリーは、元々は帳場からの土間が続いていたようで、現在は絨毯の下が昭和初期と思われるタイル貼りです。ミズナラの土台が見られ、腰壁はヤチダモ、柱にはエゾマツが使われています（写真3）。



写真3 玄関内部

■喫茶

玄関から入った先は、最近まで居間として使われていた部屋です。今は喫茶室となっていて、甘酒が人気のようです。スタッフ手作りの布製品やお菓子などを売る売店もあり、ここまで無料で入ることができます（写真4）。

この部屋に入ってまず目を引くのは3つ置かれた座卓だと思います。一番大きいものはケヤキの一枚板で、数多くの複雑な玉杅が見事に出ています。

部屋の中に幾つか置いてある小型の衝立は、全てトチノキの杅。これは、かなり前に蔵元から酒販店など

への贈答品として使われたものだそうで、裏には「北の錦」と金字で書かれています。

この部屋の柱と梁はエゾマツのようですが、居間として使っていた際には梁が天井板に隠れて見えなかつたそうです。



写真4 喫茶室と続きの和室

■炉のある和室

喫茶室の隣は和室が2間続き、柱と大きな断面の梁にはケヤキが使われています（写真4の奥）。主屋の書斎にもケヤキの一枚板の戸板が使用されており、資源が豊富な時代に建てたとはいえ、贅沢な使い方は溜息ものです。

ここは案内の最後にゆっくりお茶をいただく部屋のため、それ以外の方の立入りは制限されていますが、案内の邪魔にならない時間に頼めば見せてもらえるかもしれません。

天井はスギ。鳳凰が描かれた豪華な衝立と座卓は輪島塗の特注品。茶箪笥はケヤキの玉杅の無垢。床の間に使われたクロガキなども、木材の専門家が見て十分に楽しめることと思います。

この部屋に限りませんが、額や掛け軸等も見応えがあります。

■帳場

主屋は2階建てになっています（写真5）。1階帳場の神棚には、明治31年春と書かれた木製札が貼ってあり、酒造群の中で一番古く整備を始めた建物のひとつであることが分かります。建築当時の様子を残している建物なので、見学の際に玄関横のギャラリーから扉を押し開けて入ると、いきなり明治時代にタイムスリップした感覚を味わえます。

帳場は柱の間隔が広く、横架材として使っているカツラが長尺大断面のため見応えがあります。柱はエゾマツがほとんどで一部ヤチダモ、土間横の床板はケヤ

キです。

なお、主屋の外壁材は2階と1階で樹種が違います。2階は建築当初のものと思われるエゾマツのようで、風雨で傷みやすい1階は後の修理で替えたと思われるスギとなっています。



写真5 主屋の外観

■大広間

30畳ほどの大広間が玄関の上あたりにあります（写真6）。昭和のごく初期に増築されたのではないかと思われ、北海道ではあまり見ることが無い屋久杉の天井は面積もあって実に見事です。また、大きな床の間があり、ケヤキ、クロガキ、タガヤサンなどいろいろな銘木を見ることができます。

ひときわ目立つ太くて複雑な彫りを施された床柱は、木材好きのお客さん達がいろいろ異なる樹種名をあげたりするそうです。このため、林産試験場で顕微鏡観察などをしてもらったところ、カリンの仲間であると分かりました。

この部屋に飾つてある達磨さんの像の背後にある衝立はトチノキの瘤ですが、材料のほか枠部分の精密な加工も素晴らしい、木材を好きな方にはぜひじっくり見ていただきたいと思っています。



写真6 大広間

■土蔵

大きな蔵があります。三重の扉で厳重に守られており、見学者が自分で開けて入るのですが、大泥棒になって忍び込んでいくような気持ちになるのではないかでしょうか。

蔵の構造材は大きな断面のカツラですが、光が当たらないため長い年月を経てきたように見えない明るい色合いをしています。

夏でもとても涼しい空間です。

■庭

広い庭があり、冬期以外の営業時間内に自由に入ることができます。龍神様と白蛇様を祀った祠は雑誌で何回かパワースポットと紹介されたこともあります、参拝に来る人も増えているようです（写真7）。

春は大きなエゾヤマザクラ、秋はモミジなどが綺麗な庭ですが、木の化石（珪化木）がいくつもありますので、探してみるのも面白いかと思います。



写真7 龍神様の祠と土蔵

■おわりに

栗山町やその周辺には観光スポットや個性的なレストランが数多くあり、ドライブなどが楽しい地域です。その中にあって小林邸は、木材の専門家が見学して楽しめる奥深い施設だと思います。

格式高く感じる建物ですので、玄関を開けるのに躊躇する人も多いようですが、入ってしまえば中に流れる独特の時間と空気にはまってしまう人がたくさんいます。多くの方に、ぜひ気楽に玄関を開けてみてほしいと思っています。「栗山町小林家」で検索してみてください。